自然の多様性

川崎市立稗原小学校　田口　翔万

ブラジルと聞くと何を思い浮かべるだろうか？サッカー、リオのカーニバル、シュハスコ、アマゾン川。有名なところといえばこのあたりだが、ブラジルに実際行ってみて思ったことは、ブラジルは多様性の国であるということである。ブラジルには欧州系、アフリカ系、東洋系、など様々な民族の人たちが生活している。それはこの国が移民を受け入れてきた歴史をもつからである。

さらにこの国の面白いところは自然にも多様性があるというところである。ブラジルのアマゾン川河口のトメアスという地域には多くの日系人が住んでいる。アマゾン川というとピラニアやワニ、アナコンダなど熱帯系の動物が住んでいる不気味な場所という印象を持つ日本人が多いのではないだろうか。しかし、実際に行ってみると様々な種類の魚や果物が数多く存在し、その現地に住む人たちはアマゾンの自然が生活に溶け込んでいて危険なことなどほとんどといっていいほどなく、人間と自然が共生する社会が形成されているように感じた。

トメアスでのホームステイの中で私は「鈴木さん」という方に出会った。鈴木さんは日系二世の方であり、豊かな自然を生かした農業に取り組んでいた。その農業の中で興味深かったのが「アグロフォレストリー」という形態の農業である。これはアグリカルチャーとフォレストをかけた言葉であり、農業と森林を活かすことから名付けられている。この農業ではパームオイルの絞り粕を肥料として再活用したり、驚くことに様々な果物同士を同じ農地で育てたりしていた。同じ果物を一律に揃え効率的に栽培することが一般的であるが、ここではいくつかの果物同士が同じ農地で共存していた。全ての植物に当てはまるわけではないが、同じ農地でも喧嘩することなくそれぞれが健やかに成長するのだそうだ。また、鈴木さんは極力アマゾンの自然を残すことも大切にしていた。元来の自然の姿を残すことがこれからの社会のため、そして農業の可能性を考えるうえでとても大切だと話していた。

人も、そして自然も共生するブラジル。当たり前のように共生する社会では区別や差別もなくそれぞれが自分の場所で居心地良く過ごしている。ブラジルの自然も生き物もまた、それぞれの場所でのびのびと過ごして、そこでできた豊かな恵みやコミュニティはきっと私達の生活をよりよく支えてくれているはずだ。